戦争と犠牲者

工藤徳子（咲ケ丘・70歳）

昭和十六年十二月八日、真珠湾奇襲で始まった太平洋戦争は、米英軍の艦隊、航空機などを撃滅、大勝利を治めた。

日本軍は破竹の勢いで、米英基地のシンガポール、グァム、香港などを占領、南西諸島、南洋諸島など日本軍の向う所大勝利で、不安も心配も吹き飛んで、毎日、日本軍万々才で旗行列までして喜びに酔っていたが、年月が経つにつれ、あの大勝利はどこへ、出征する人が目立って多くなって来た。ラジオ、新聞のニュースで、日本軍の戦果がおもわしくないようだ。

毎日の日常生活に喘ぐほどでもなかったが、親元を離れて集団で田舎へ学童疎開が始まり、十九年の終わりに考えてもいなかった、米軍爆撃機B29が都下北多摩郡へ来襲、中島飛行機工場（徴用であつまった人達が、休む暇もなく軍需品を作っていた）が集中爆撃を受けた。

二十年に入ると、日本軍玉砕、全員戦死など日本の敗戦が多く、なんとか一日生活が出来るのも、戦場で戦っている兵隊さんのおかげ、一日も早く戦争をやめてほしいと願っていたのに、突如、三月初めに、東京の中心下町をB29が来襲、低空飛行で民家めがけて焼夷弾を無差別に投下、死傷者、焼けだされた人、家など、地下鉄から血みどろの人々、爆撃で上半身が飛ばされ屋根に乗っているなど、生地獄のようだった。その被害は、大変なものだったという。

今日が無事で終わるとほっとする日々、戦争はますます激しく、日本軍の苦戦が続き、大学生までがペンを銃にかえ、学徒出陣で戦場に向っていった。食料も底をついて来たのか、雑穀類が多く、トウモロコシ、コウリャン、ドングリ粉、サツマイモなど、食料不足で近郷の農家へイモの買い出しに行っても、物々交換でないと、なかなか分けてくれなくなった。

なりを潜めていたB29が、四月、今の副都心を爆撃、新宿方面が空を真っ赤に燃え広がっているのが、私の住んでいる杉並からよく見える。夜は燈火管制の毎日、主人から、ここもいつ空襲されるかもしれないから、心構えをしておくようにと言われる。軍需物資も無くなって来たのか、隼、神風特攻隊が出動する新聞を見た。飛行機に乗り、敵地めがけて飛行機もろとも突入攻撃、二度と帰る事はない。もう最後のあがきのようだ。国の為とは言いながら、親はどんな気持ちでいただろう。主人もいつ召集があるかもしれないと話しながら、夕食のスイトンを食べ、片付け始めていたら、空襲警報発令の連続する大声が夜空にひびいた。

いつもと違うぞと、主人と外に出て空を見たら、真上に敵機、あっと言う暇もない。「ピュー」と音より早い黒い長い棒のような物が、「バラバラ」と雨のように落ちて来る。早く入れと突き飛ばされ、玄関の中に転げこんだ途端「ドカン、ドカン」とその大きな音と同時に、頭に「バシャ」

と何かが、かかった。瞬間、昼をあざむくばかりの銀色の光の火花が、「バリバリ」と押入れの下から火を吹いている。早く逃げろの声、すぐに立てなかったが、どんな事があっても、これだけは持って逃げようと、玄関口に置いてあった柳行李（十月に生まれる子供の為に、着物をほどいて作った、オムツ、肌着などが入っている。）の縛ったところを持ったらしい。

外に出たら隣の家に火の手があがり、道路に出ると並んでいた店も火に包まれ、それを目標に容赦なく投下する。もう、一面火の海。泣き叫ぶ子供、何を言っているのか大声、奇声が入り乱れ、空を焦がすような真っ赤な炎、逃げまどう人達の姿が紅蓮の炎に黒く写し出され、その恐ろしかった事。（今でも、あの炎の色と黒い人影が浮かび、忘れる事は出来ません。）無我夢中で、どう逃げて来たのかわからない陸橋の所に来ていた。家から三〇〇メートル以上あると思う。行李もある。引き摺って来たらしい。火の粉が飛んで来る。陸橋の下に行くのには、三メートル位の高さの土手、飛び下りる人影、私はずり落ちた。陸橋の下に来た。人がいる。

そばの竹藪に火の粉がバラバラ落ち、風が起きて枝が左右に揺れ動き、「ゴーゴー」という音がして、燃え上がらないかとこわくていられない。竹は燃えにくいから大丈夫と、誰かが言っている。逃げて来た人達がもう丸焼けだ。又、下町もやられたらしいと言っている。主人が、なかなか来ない。いつも避難場所ときめていた。怪我でもしているのかと、心配で落ちつかない。大丈夫か、と主人の声。ああ、良かった、声がつまって出なかった。

水や砂をかけて消して来たが、お隣は火の回りが早く、うちも焼けているかもしれない、と言われ、力が抜けて話す事も忘れて、早く夜が明けないかとそればかり考えていた。その時間の長かった事。空が、いくらかしらんで来た。主人と一緒に陸橋の上に出た。燃え尽くしてしまったと言いたいほどの焼け野原、燻った煙が立ちこめている。

あっ、家が家が、と大声を出してしまった。本当に私の家がある。急いで家の中に入ったら汚水だらけ。残っただけで、本当にうれしかった。主人が屋根に大きな穴があいて空が見えるぞ。屋根を突き破り、押入れも突き抜けて、火を吹いていたのだ。外に出そうと、水を入れていたバケツの底が抜けている。そうだ、私が転げ込んだ時、頭にバカッとかかったのはこのバケツの水だったのだ。主人が、バケツで命拾いをしたんだ、と言われ、場所がもう30㎝ずれていたら、頭に落ちていたに違いないと思ったら、怖さとうれしさで涙が出て来てしまった。バケツの下の板はささくれて、凹んで穴があいている。気がついたらモンペイの肩がぬれていた。

気持ちが落ちついて外に出て見たら、永福町の駅も燃えて、電車も外枠だけ残して並んでいる。歩いて二十分位かかる大宮神社が、目の前に見えるほど焼けしまった。お隣の家も焼け落ちてしまった。風の向きと四メートル位離れていたこと、焼夷弾にもエレクトロン、油脂とあったという（人の話）。私の家に落ちたのは、一発エレクトロンだったらしい。

裏側に十軒位、家が残った。この五月二十三日の空襲で、東京は大部分焼けてしまったらしい。水も出ず、主人が何かないかと焼け跡へ探しに行き、縁のかけた土釜を拾って、水をくんで来てくれた。その水のおいしかった事。

主人の会社も焼けてしまい、ひとまず田舎へ行く事にして、上野から貨車に乗り、二倍近い時間がかかって、主人の実家、山形へ。ここで終戦を迎えました。